

メンタルフレンド活動と役割意識に関する探索的研究

○伊藤美奈子・酒井順子*

(お茶の水女子大学) (市川市教育センター)

メンタルフレンドとは、児童相談所の指導の一環である「ひきこもり・不登校児童対策モデル事業」により派遣される学生ボランティアをいう。心理臨床の分野でも、さまざまな実践を通して、より子どもと年齢の近い兄・姉的存在の有効性が確認されつつある。ただし、メンタルフレンドが、どのような役割意識を持ち、どんな悩みを抱えながら活動しているのか、そのサポート体制はどうなっているのかについては、まだ十分明らかにされていない。本稿では、全国で活動中のメンタルフレンド(以下 MF)を対象に、調査を実施し、今後の活動における示唆を得ることを目的とする。

方法

調査対象 児童相談所で活動経験のある MF152名。平均年齢は 21.3(SD=2.48)歳。

調査時期と方法 1998年9～10月。郵送法。

調査内容 ① MF の属性、②活動状況、③児童相談所相談員との連携方法(研修の有無、連絡の方法)、④活動に関する意識:関わりに関する15項目(<積極的関わり><友達の関わり><受容的関わり>の3因子)、悩みに関する13項目(<迷い><連携不足><過剰負担>の3因子)、MFの変化に関する16項目(<成長><関心の高まり><臨床志向>の3因子)、活動満足度。各得点は1/3⁰ 1～4点。

結果と考察

まず MF 活動に関する意識の平均を見ると、関わり方では友達の>積極的>受容的、MF の変化では3つとも大きく認知されており、悩み得点は全体的に低い、活動上の迷いを抱く者は多い(Table1)。

各得点と変化3得点、MF の満足度、担当児数、活動期間との相関を調べた。満足している MF は

ど、迷いは小さく受容的な関わりをし、MF 自身の変化も大きい。一方、担当児数が多いほど、また活動期間が長いほど、MF の成長は大きく臨床志向が強まり満足度も高いが、その一方で連携不足や過剰負担という悩みも抱えている。

次に、活動形態(家庭訪問タイプと来所タイプ)で比較したところ(Table2)、変化3得点と満足度は訪問タイプの方が低いことが示唆された。尺度得点レベルでは差はなかったが、項目得点で比較すると(差のある項目のみ)、訪問タイプの方が“相談内容が重く、家族との問題を抱えやすい”状況にあることがわかる。さらに、相談員との情報交換も間接的で研修への参加回数も少なく、十分な連携はできていないということが明らかにされた。

以上、MF は子どもとの友達の関わりを志向し、その活動を通して自らも成長していくが、その一方で MF 固有の悩みも抱えることになる。そしてこの悩みは、子どもの家庭を訪問するという活動状況で特に発生しやすいといえる。

Table 2 活動形態による各得点の比較

	来室タイプ n=45	訪問タイプ n=85
<変化> 成長	3.08(.69)	>>2.66(.62)
関心の高まり	3.22(.64)	> 2.93(.79)
臨床志向	3.05(.54)	> 2.80(.66)
満足度	2.66(.91)	>> 2.17(.92)
家族より個人的相談を受けた	1.42(.44)	<<1.80(.84)
子どもから難しい相談を受けた	1.63(.56)	≤ 1.84(.85)
活動がマンネリ化した	2.64(1.06)	≤ 2.98(.93)
過度の謝礼に困った	.78(.15)	< .87(.34)
一人で背負っているような負担	.85(.30)	< .99(.48)

* <<: p<.01, <: p<.05, ≤: p<.1

Table 1 各得点間の平均と、満足度・担当人数・活動期間との相関

	関わり方			悩み			MFの変化		
	積極的	友達の	受容的	迷い	連携	負担	成長	関心	臨床志向
平均得点(SD)	2.96(.52)	3.50(.39)	2.68(.46)	2.89(.71)	1.64(.48)	1.63(.43)	2.81(.66)	3.09(.74)	2.69(.66)
満足度	.101	.129	.170*	-.170*	-.068	-.027	.515**	.206*	.395**
担当児の人数	.014	.004	.146+	.024	.192*	.264**	.248**	.056	.222**
活動のべ期間	.067	-.020	.175*	-.049	.235**	.312**	.187*	-.013	.226**

** : p<.01 * : p<.05 + : p<.1